書　評

青野篤子、湯川隆子 編

『フェミニスト心理学をめざして』

三　浦　欽　也

本書は、2002年度から2004年度にかけて、日本心理学会全国大会に併せて開催された、日本心理学会ジェンダー研究会の有志によるシンポジウムの内容を再構成し、若干の章を加筆したものである。本書の意図するところは「はじめに」で明確に述べられている。少し長くなるが引用しておく：「本書の目的は…（中略）…フェミニスト心理学が掲げている目標、つまり、性差あるいはジェンダーは社会によってつくられるという認識に立ち、女性差別や女性に対する抑圧を解消すべく社会に発信し、貢献しうるような研究とはどのようなものか、何をどのように研究すればジェンダーやフェミニズムの視点に立った研究となるのか、どのようにしたらジェンダー・センシティブな研究眼をもつことができるのかを提言し、討論し、かつ、その成果を共有し、次の世代に伝えることにある。」（本書 p. 4、11. 6–13）。したがって、本書の対象とする読者は、主に心理学研究者や心理学研究者を志す者であろう。それゆえ、心理学界とはほとんど係わりのない、私のような者にとっては、正直なところ、十分に理解できないところもあった。しかしながら、本書で提起される問題のいくつかは、他の研究分野においても、十分に考慮すべきところがあるようにも思われるので、その点を中心に評していきたいと思う。ピントはずれのことを書いているかもしれないが、そのような事情なのでご容赦頂きたい、

本書の全体の構成は、3回のシンポジウムの各々に対応して第Ⅰ部～第Ⅲ部

が置かれ、その後に、まとめとしての終章と資料編が追加された形になっている。第Ⅰ部～第Ⅲ部の各部では、該当するシンポジウムの発表者（各部３～４人）が、発表内容を元に改めて一章ずつ執筆し、シンポジウム時の指定討論者の一人がそのまとめのコメントを書き加える、という形式になっている。

各回のシンポジウムにはそれぞれ決まったテーマがあり、第Ⅰ部～第Ⅲ部の各部もそれに沿ったものになっている。第Ⅰ部は「フェミニズムと心理学」と題され、フェミニスト心理学とは何か、どうあるべきかが、主に伝統的な心理学と比較して論じられる。第Ⅱ部は「フェミニスト心理学の研究課題」と題され、フェミニスト心理学が何を研究すべきなのか、その研究課題について論じられる。第Ⅲ部は「フェミニスト心理学と女性の位置」と題され、現在の心理学界におけるフェミニスト的研究の現状と、研究の主体として、また対象としての女性の位置について論じられる。

複数の執筆者による書籍であるため、その主張や立場は執筆者によって微妙に異なるが、本書の論点は、おおよそ以下のようにまとめられるのではないかと思われる。

（１）心理学研究は、（特にそのジェンダー観において）価値中立たりえず、研究者はそれに自覚的でなければならないということ。

（２）性差の多くの部分は社会的に構築されたもの（ジェンダー）であるということに立脚し、それに起因する社会的な問題に対して、フェミニスト心理学は関心を払うべきであるということ。

（３）フェミニスト心理学は、研究のテーマ選択からその方法論にいたるまで、上記（１）、（２）を反映させ、ジェンダーに起因する社会的な問題の解決・改善に向けて具体的な提案・提言をしていくべきであるということ。

これらの論点は、フェミニスト心理学、あるいは心理学に固有のものではない。例えば（１）に関して言えば、そもそもヒトの認識は常にその世界観・価値観によってバイアスを受けるものである。そのことを自覚し、それによって

生じる硬直した見方を打破すべく不断の努力を続けることは、研究者として重要な態度である。（2）に関しても、自分の研究内容が社会的・倫理的な問題と密接に関与するとき、その問題と自分の研究との関係を真摯に検討することは、研究者の重要な社会的責務の一つであると考える。また、（3）は、基礎と応用、理論と実践の相克という古くて新しい問題とも重なる。これは、多くの研究者がしばしば直面する、研究の有用性とは何か、有用な研究とはどのような研究か、研究者がどこまで社会的な「運動」にかかわるべきかという問いをはらんでおり、この問いもまた、研究者の社会的責務として、常に自らに問い続けるべきものであるように思われる。したがって、心理学以外の学問領域においても、あるいはジェンダー起因以外の社会的・倫理的問題にかかわる研究においても、これらの論点と同様な検討を重ねることは、十分に意義のあることと思われる。

しかしながら、本書を通読したとき、少しばかり違和感を感じた点もあり、それについても、いくらか触れておきたい。

フェミニスト心理学は、その成立自体が旧来の価値観（性別観）への異議申し立てという側面を持つ。したがって、そのような価値観（性別観）を誤ったものとして敵視し、その打破を目指すのは当然であるが、では「正しい」価値観（性別観）とは何かということについて語られることが、いささか少なくはないだろうか。「××は社会的に構築されたものである＝××は生得的な性差ではない」という主張は多いが、「××は生得的な性差である」という主張は少ない。そもそもフェミニスト心理学とて、「生得的な性差は存在しない」と主張するものではあるまい（中にはそう主張する研究者もいるだろうが）。しかし、「××は生得的な性差ではある」と主張することが、旧来の価値観（性別観）を補強するものとみなされてタブー視されるような空気があるとすれば、それは問題ではないだろうか。あるいは、社会構築主義の立場から、「××は生得的な性差ではある」という主張自体がすでに社会的に構築されたものであり、素朴唯物論的な「生得的性差」などは存在し得ない、という考え方もあ

るかもしれない。だとすれば、なおさら、ヒトは「構築されたもの」から逃れ得ないのであり、どのようなものを「構築」すればヒトはもっと幸福になれるのか、もっと議論があっても良いのではないだろうか。「構築されたもの」を破壊し続ける「運動」こそが重要であるという考え方もあるかもしれないが、それはあまりにも不毛な考えのように思われる。

また、一般に、旧来の価値観への異議申し立てという「力学」の中では、その異議申し立ての要因となっている問題の解決・改善に直接かつ明確に結びつかない行為は、間接的にその旧来の価値観を補強するものとみなされやすいものである。あるジェンダーに関する研究が、その社会的な問題の解決・改善に、すぐには役立たないからと言う理由で軽視されるようなことは、あってはならないだろう。杞憂であるかもしれないが、そのような不安を抱かせる文書もあったことも申し添えておく。

結局、先の（1）の論点の繰り返しとなるが、いかなる研究も価値中立たりえないのであり、旧来の価値観（性別観）を批判的に検証するのと同様に、自己の価値観（性別観）をも不断に批判的に検証することが、当然ではあるが必要であるように思われる。また、旧来の価値観（性別観）を否定するだけではなく、理想的なかくあるべき価値観（性別観）の具体像について語ることも、青臭いかもしれないが、重要なことではないだろうか。

（かもがわ出版、2006年、本文181頁、本体2000円＋税）